

原野先生と学生さんたち

川那部 保明

原野昇先生には、2年のあいだ毎月東京でお会いするというフランス語関係の仕事で初めてお会いしてから、はや20年のご厚誼をいただいていた。その間、1997年にお声をかけていただきランボオの詩について集中講義をさせていただいたが、もう一度、それも先生のご退職の年となるこの2005年にお招きをいただき、再度フランス詩について広大生の諸君と、今回はゼミ形式で学ぶ機会を与えていただくことになろうとは、思ってもいなかった。

初日は12月23日、雪の朝。定刻を少し過ぎて、文学部5階のゼミ室に連れて行っていただく。先生がドアを開け、私はあとからついて入室。どこに身を置こうかと思案する間もなく、原野先生は私の紹介にはいった。先生はいつでもマイペースだ。7～8名の学生諸君も、身構える暇もなくいきなり始まった先生のお話、静かに耳をかたむけている。そのうちフツとお話が終わり、「それではよろしく」と先生はご退席なさる。私はそれとおぼしき席に腰かけ、先生のお話のテンポを継いで学生諸君とそれとない会話を交わし、それからおもむろに本題にはいる。集中講義の始まりは、いつもいささかの緊張を伴うものだが、今回はごく日常の授業のようになめらかにはいっていったのは、あとから思えば先生がドアを開けた最初から、ひとつのペースをつくってくださっていたからなのだ。

その日の夜、先生は、正門から少しくだった居酒屋に連れて行ってくださった。リールでDLを取得してきた伊ヶ崎さんと現在修論執筆中の佐藤さんの女性ふたりも一緒だが、原野先生の歩調はマイペースだ。何年ものあいだ鍛えてきた水泳力とペタンク力で、グングンと進んでゆく。後続隊がはぐれるのではないかと心配で時々振り向いてみたが、不思議なことにそのつど彼女たちは曲がり角のこちら側、視界の範囲内をきちんと歩いている。そして、目的の居酒屋に先について、人数が一人増えたことなどを店員と話しながら、やがて席に

着こうとするころ、計算したようにちょうど彼女たちも到着する頃合いとなっていたのにはびっくりした。

3日目の夜には、原野先生は、総出の会を用意してくださった。いつも明るい松本先生、15年来の知己サントニ先生、三重時代の同僚地村先生にも声をかけてくださった。そしてもちろん学生諸君（沈着に思考する谷川さん、感性豊かな釣屋さん、がんばり屋の平田さん、広角打法の田中君、自然な気配りの南波さん、秘めた気力の浜谷君 — 会には欠席だが真面目お茶目の藤本君）。乾杯のあと即座に先生、「えーっと、揚げ出し豆腐たのむ人は？」。これを聞いて学生諸君全員、そして私も、納得の表情。昼の授業の時に彼らが教えてくれたとおりの、いつもどおりの展開なのだ。そして時たち会たけなわとなれば、先生おもむろにご愛用のデジカメを手にとり、立ち上がってみなの一・ショット、スリーショットを撮り始め、学生諸君も笑顔でポーズをとっている。すべて先生はマイペース。そしてそのマイペースに、学生諸君はみんなゆったりと、安心してひたっている。

思うに、一見頑固一徹にみえる先生のマイペースは、実は気配りのマイペースなのである。先生のさりげない気配りのもとで、学生諸君はじつにのびのびと、勉強し、学生生活を送っているように思えた。そしてそののびのびとした雰囲気、広大のフランス文学の教室をやわらかくかつしっかりと包み込んでいるように思えた。よそのコース・分野の授業で理解不能であったことが、原野先生の授業で一気に氷解したと話してくれた学生がいたが、こういったことも、先生の学生への気配りと、それに応じた学生からの先生に対する信頼感があって、はじめて可能なことであったにちがいない。そう考えると学生諸君が、ジャコテとランボーとハイクという一見とりとめもない三題断を、それぞれの興味に沿って咀嚼し、自由闊達な反応を示してくれたのも、偶然とは思えないのである。

先生のご退職の年に集中講義にお招きいただき先生のマイペースに再度ひたれたこと、そして先生の育てられたかくものびやかな学生諸君と4日間をともにできたこと、幸せでした。ありがとうございました。今後ともなにとぞ、ご健勝であられますように。そして、いままでどおりのご指導・ご鞭撻を、心よりお願い申し上げます。